

鳴り砂

2-138 号 (通巻 317 号) 2025. 9. 20.

発行●みやぎ脱原発・風の会

〈連絡先〉 〒980-0811

仙台市青葉区一番町 4-1-3

仙台市市民活動サポートセンター内 LC No.76

電話 & FAX 022-356-7092 (須田)

<http://miyagi-kazenokai.com/>

《郵便振替口座》 02220-3-49486

会費●3000 円 購読会費●1500 円／年

「経路依存性」を打ち破れ！ 原発ゼロの未来を選ぶ討論集会が大成功

8月30日、「原発ゼロの未来を選ぶ 8.30 討論集会」がフォレスト仙台にて、会場 130名、Zoom25名の参加で開催された。主催は「さようなら原発みやぎ実行委員会」。昨年末女川原発2号機が再稼働したことを皮切りに、原発回帰の動きが加速している。これは今年2月に閣議決定された「第7次エネルギー基本計画」に沿ったものだ。これに対し、どのような論理と運動を構築していくのかを考えていこう、と企画された。

松久保肇さん（原子力資料情報室事務局長）が「自公政権による『原発回帰』への大転換を問う」と題した基調講演を行い、中嶋廉さん（原発問題住民運動宮城県連絡センター世話人）と鷗原敦子さん（東北大学大学院農学研究科学術研究員）も交えてパネルディスカッションを行った。会場からの質疑応答も交え、中身の濃い集会となった。当日の動画はこちら。

<https://www.youtube.com/watch?v=J6a9WHntyO>

風の会 HP には動画とあわせて当日の資料も掲載しています。

<https://miyagi-kazenokai.com/>

●松久保肇さん講演～自公政権による『原発回帰』への大転換を問う～

エネルギー基本計画での原発推進の理由は4点。①エネルギー安全保障に資する準国産エネルギー、②安定電源、③脱炭素電源、④他電源と遙かにコスト水準。これらを批判する前に、松久保さんは14年たった福島第1原発事故の状況から話を始めた。

○福島原発事故の廃炉計画の見直しが必要

廃炉は2051年まで、また中間貯蔵施設は2045年までに撤去するという約束になっています。デブリは約880t（推定）ですが、スリーマイル島原発事故では133tで、1日平均85kgを取り出しました。ポイントは、水を張ることができた、ということです。福島では、底が抜けて水が溜められない。本格取り出しが2037年以降なので、2037年～51年で取り出すことを想定すると、1日平均170kg。スリーマイル島の2倍です。いろいろな人がもう無理だと言っています。

みやぎ脱原発・風の会 公開学習会 vol. 20

～どこにも行き場のない「核のゴミ」～

「六ヶ所再処理工場」と核燃料サイクルの真実

講師：山田清彦さん（核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団事務局長）

日時：9月28日（日）13時30分～（開場13時） 〈入場無料〉

会場：仙台市戦災復興記念館 4F 研修室（青葉区大町2-12-1）

主催：みやぎ脱原発・風の会 《ZOOM》ID: 824 4764 1879 パスコード: 706275

〈連絡先〉 090-8819-9920 メール hag07314@nifty.ne.jp（舘脇）



低レベル放射性廃棄物が、国内の原発全部で約60万tに対し、福島第1原発6基だけで780万t出てきます。この処分地点を探し始めないといないのですが、普通の原発の廃棄物の処分場所すらまだ決まっていません。そしてお金です。普通の原発の廃棄物処分費は250億円ぐらいなので、単純計算すると福島原発では22兆円となります。廃炉費用は8兆円を見積もっているので、これだけでも全く足りません。プラス他の費用などもかかってきます。私は原子力小委員会で何回か提起していますが、その度に政府はこの議論は他の委員会でやっているからここではしません、と。でも、他の委員会でやっていません。非常に無責任です。将来的には電気料金に上乗せされて国民負担になると思います。

○原発は温暖化対策にはならない

電源ごとで計画から稼働までの期間が1番長いものは原子力で20年、この時点ですでに選択対象外です。電力中央研の試算だとCO₂排出が1kWhあたり20gで、これが1番低いとしていますが、海外では違う。例えばソバクールというイギリスの研究者は24~32gとしています。また、2030年までに電源別でどれだけ排出を削減できるポテンシャルを持っているかのIPCCのレポートでは、風力と太陽光が圧倒的に多く、0ドル以下で対策できる領域が大きい。原子力はコスト高で削減ポテンシャルが少ない。

○原発は実は高い～建設費コストの算定を日本政府は低く抑えている

政府が行ったコスト検証だと、原子力は1kWhあたり12円～13円。ラザードという金融機関（海外）の推計値では27円。ブルンバーグのシンクタンクの推計では35円。日本の推計値の2～3倍近いコストがかかっている。一方で、日本では太陽光と風力が1番高いけれども、海外の推計では再生可能エネルギーが1番安い試算になっている。なんでこんなことになるのか。理由は建設コス

トの推計です。欧米では原発1基2兆～4兆円。バングラデシュのルプール原発だと1兆円。ところがエネルギー基本計画では7200億円です。発電コストは建設費が1000億円上ると1円は上がりります。実際、電力会社は、原発はコストがかりすぎて怖いから自前では建てられません、国民負担で立ててくださいと言い、国はその制度を導入しました。国は、原発は安いと言って推進しながら、実は高くなるかもしれないからその分のコストは全部国民負担としているわけです。詐欺みたいな話です。

○原発は紛争時に守ることができない。また、ウラン供給は不安定で、「エネルギー安全保障に資する」はウソ

政府は、原発の弾道ミサイル防衛についてイージス艦とPAC3で防衛する、と言っています。PAC3の射程距離は大体半径35kmと言われています。そこで半径35kmでPAC3が配備されている基地を中心に円を書いてみましたが、どの原発も入らない。全く防衛されていません。

また、燃料が安定供給されるという話がありました。ウランの生産量のシェアを見ると、カザフスタンが41%。ニジェールもウラン生産が多いのですが、2023年軍事クーデターがあって、国有化してロシアに輸出するという話をし始めています。旧東側の関連諸国がウラン生産の半分ぐらいを占めています。

○世界と逆行する電源構成

世界の電源構成は、2040年に原子力は10%ぐらい、再生可能エネルギーが80～90%、残りが脱炭素火力で2%です。日本が目指す電源構成は、原子力が20%、世界と比べて倍です。再生可能エネルギーが40～50%と世界の半分、そして火力が30～40%と、世界から見れば明らかに逆行しています。しかもこの化石燃料を使う火力の5割～9割は脱炭素火力にしなきゃいけないので、ものすごいお金がかかります。原子力を20%にしようと思ったら、全て再稼働しないと達成できません。じゃ他の道はあるのか。できます。ヤコブソンという研究者が出している、2050年までに100%水力と風力と太陽光だけでエネルギー供給を賄うシナリオです。半分は省エネで達成するのがポイントです。

○再稼働で電気は安くなったのか？ 実は…

東北電力の計画では、原発を再稼働するので、JEPX 卸電力取引所の調達量を 38.67 億 kWh 減らせますとしていますが、ポイントは 20.97 円 /kW という調達価格で、811 億円下げられますと言っていることです。確かにこの年（2022 年ころ）は 20.97 円なのですが、2019 年～2024 年の平均は 14.27 円、2005 年～2024 年で 11.82 円。そして 2025 年は 11.26 円です。東北電力の計算は調達価格が高い年のものです。

一方、原発再稼働による費用増として、例えば核燃料の費用とか安全対策費の減価償却の費用とかがあり、合わせると 439 億円増えます。これを 811 億円と差し引きすると、例えば 2005 年～2024 年の平均価格では 18 億円しか下げられません。2025 年の価格で見ると実は 4 億円損しているという状況です。

しかも、これ以外に東北電力は原発維持費として年間 1000 億円払っています。つまり、東北電力の電力消費者は、原発を維持することによって実は損しています。

まとめますと、原発維持のために巨額の支出を既に行っており、電気料金は原発のあることで実は上がっているということです。原発を再稼働すると電気料金が下がるとみんな思っていますが、本当は違います。

講演後の質問に対して、「社会科学や経済学で『経路依存性』という理論があります。原子力を進めることを決めてその方向に進んでいる以上、その選択しかできないっていうのが、経産省と電力会社の今の置かれている状況です。いろんな約束をしていて、やめるのが非常に難しくなるわけです」と回答した。

●中嶋廉さんのお話～使用済燃料の乾式貯蔵施設に不同意を求めた運動で問い合わせたもの

女川原発 2 号機の燃料プールの空き容量は 345 体です。1 回のサイクル（13 ヶ月運転・3 ヶ月点検）で 130 体燃料交換するので、2、3 回しか稼働できない。乾式貯蔵施設を作つて使用済燃料を移しても排出する先がなく、作つたら必ず超長期保管にならざるを得ない。この運動では、安全神話の嘘で事故を招いた原子力行政が、またも欺こうとしていることを浮き彫りにできた。村井知事が早期搬出を要請せざるを得なくなったのも成果ですが、知事は期限を定めるなどの具体的な条件はつけていません。

乾式貯蔵施設への使用済核燃料が予定通り搬入されるとして計算すると、すべてが搬入されるのは 2042 年頃で、営業運転開始から 47 年目です。

老朽化した後まで運転しようとする危険な計画です。去年 11 月から女川の 2 人の町会議員が全世帯対象にアンケート調査を始めましたので、私たちは支援活動に取り組みました。

今後は、原発の経済性を追及して、命取りにしていく運動が大事です。女川原発 2 号機の発電原価 35 円です。また、原発の維持管理費とか新增設の経費を電気量に上乗せする容量市場や脱炭素電源オークション制度が作られていますから、電気代の問題の追及はますます重要です。もう一つは気候変動対策です。海外では海面の上昇に備えて貯蔵施設を高いところにしている国がある。女川では海拔 38m と 36m で、あんな場所には作るべきじゃありません。審査基準では、気候変動対策とか超長期保管のリスクや負担は考慮していません。

まもなく宮城県知事選挙ですが、使用済燃料を敷地外に搬出する約束を具体化させる再協議を東北電力に申し入れる、専門家委員会を作つて東北電力に老朽原発の検査データを出させる、避難計画は全面的に再検討する。このようなことができるまともな知事を誕生させませんか、ということを申し上げたい。

●鳴原敦子さんのお話～何が「原発回帰」を可能にしているか～事故後の汚染廃棄物問題から考える～

環境基本法の前身は公害対策基本法ですが、放射性物質はこの法律では扱えないとなっていました。しかし福島原発事故後の 2012 年に「放射性物質による扱いは他に委ねる」規定が削除されました。放射性物質は環境汚染物質に位置づけられたのです。合わせて環境関連法の個別の法律も改正するということで、大気汚染防止法とかは改正されたのですが、土壤汚染対策法と廃棄物処理法と海洋汚染防止法、これらは改正が見送られました。廃棄物処理法の中で放射性物質は除きますと言いつつ、特措法ではこれを一般廃棄物と同様に扱います、と言っているわけです。

原子炉等規制法の中でクリアランスレベル（＝埋め立てなくていい基準）は、100Bq/kg と決まっています。それが、事故後特措法ではこれを 80 倍にしてどんどん燃やして処理してくださいと、これが非常に問題です。土壤の再生利用とも非常に関わってきます。横浜とか千葉の方で 2000Bq/kg 以上は受け入れないという動きがありましたが、環境省はやめてくれと通知を出し、締め付けも非常に強まっています。

放射性物質は、生活環境から隔離して保管せよという原則が元々あったはずですが、これを薄めて広げる、拡散するという路線に変えています。最終的

な処分量を減らし、コストがかからないような形で処理を進めることができます。関係主体との間での丁寧な合意形成はすっぽと抜け落ちて、約束が反故にされていく。法律を変えたり、あるいは法改正を後回しにしたりということが、ツールになっている。これは、原発を活用していこうという流れと、表裏一体で進んできているものだと考えられます。

女川での再稼働が決まった後に、県知事がこれは国策だからということを言っていたことに、非常に愕然としました。国策が生んだ被害があの福島の原発事故だったはずですが、その被害がまだ終わってなんかいないのに、また同じ論理で再稼働が正当化されることは見過ごすことができません。



●3者によるパネルディスカッションでは、住民の意見をいかに反映させるかをめぐって、活発な討論が行われた

松久保さん「この乾式貯蔵施設設計画はすごく拙速に進められている。建設期間が短く1年半ぐらい。伊方では3年半ぐらいです。あと、パブコメもすごく形骸化している。ヨーロッパだとオーフス条約が制定されていて、住民に情報公開しなきゃいけないし、市民の意見をちゃんと聞かなきゃいけないですよ」というルールメイキングがされています。地方から作っていって中央に向かっていくって、いうのもいいルートかも」

中嶋さん「特に原発行政の場合は自治体と住民の意向が反映される仕組みがほとんどない。安全協定を拠り所に自治体がやれることがあるが、それが全く活用されていない。将来にわたる環境問題については住民の意見を聞くことが不可欠で、それを地方から運動を起こして国の制度にも盛り込ませていく、そういう大きな意気込みと視野でやっていく必要がある」

会場の女川の高野さんからも発言があった。「原発が建ってからの鬭いは過疎化もあってなかなか厳しい。30km圏内の中でどう鬭うかっていうことも検討しないと、と思っています。パブコメは改善すべき。公聴会の方がずっといい」

鳴原さん「国際社会の常識をもつと使っていくのも大事では。SDGsの原則には環境問題で被害を受ける関係主体全員が関わって協議をすることが謳われています」

松久保さん「緊急時被ばく状況、現存被ばく状況、計画被ばく状況っていう3つの区分がありますが、その真ん中の現存被ばく状況という言い方で日本全国みんな苦しむことが当然のようなことが言わされている。あの戦争時と同じ話です。みんな受忍しろと。でも違う。空襲受けた人の被害がなかったことにされてしまう。それと同じことが今日本で起きているということだと思います」

多々良さん「経路依存性の悪夢から覚めるには、政権交代を絶対やんなきゃダメだというのが1つ。それじゃちょっと時間がかかりすぎるから、住民自治の力をもっと発揮しようと。ただその難しさのお話もありました。そこで、県内の運動をもう1回連携させるいいキッカケが10月の県知事選挙です。遊佐美由紀県議が出馬の意思を表明しました。皆さん力を合わせてやりましょう」とシンポジウムを締めくくった。

集会の最後に、小野寺信一弁護士から、佳境に入っている津島訴訟控訴審の支援の呼びかけがあった。「9月19日に長谷川公一先生の証人尋問が行われます。これはあの6.17の最高裁判判決を覆す可能性があります。11月18日には仙台弁護士会館で津島支援集会がありますので、是非それにも参加していただきたい」

この日の集会で、冒頭にあげた国の原発推進の4つの論拠はことごとく崩され、参加者は改めて原発推進の無理筋を確認した。そしてその無理を、「経路依存性」としてあくまで通そうとする動きに対し、「住民自治」にもとづき運動側が連携を深め、地方から攻めていくことも含めしなやかに闘い続けていくこと、その一環として10月の宮城県知事選にも向き合っていくことを共有した。

(館脇)



【追記】7月25日、女川原発再稼働を許さない!みやぎアクション、原発問題住民運動宮城県連絡センター等5団体は、宮城県と女川町、石巻市に、「女川原発使用済核燃料乾式貯蔵施設設計画に『同意するな』と求める署名」を最終提出し、「不

同意」することを改めて要請した。県提出には県議3名・市民11名、石巻市では13名、女川町では6名がそれぞれ参加。さらに、29日には女川原発UPZ住民の会7名が、斎藤正美石巻市長に乾式貯蔵施設設置反対の申入れを行った。

しかし、同日29日、宮城県・女川町・石巻市は、「使用済み燃料の一時的な貯蔵（保管）施設」と強調し、事前協議申し入れへの「了解」表明を行

った。これに対し、30日、みやぎアクション等5団体11名が、「使用済燃料の乾式貯蔵施設建設への了解に厳しく抗議する声明」を記者会見で発表した。

こうした市民の波状的な行動に追い込まれた宮城県・女川町・石巻市は31日、資源エネルギー庁に「六ヶ所再処理工場の早期整備」を求める要請書を提出した。

「ふるさとを返せ 津島原発訴訟」控訴審第14回公判報告

ふるさとを元に戻して、みんなで帰る

8月6日に「ふるさとを返せ 津島原発訴訟」の第14回裁判がありました。いよいよ大詰めです。

まずは原告意見陳述。今回はSさん。1985年生まれのSさんは、津島で暮らした25年の思い出、原発事故後仕事も変え、住まいも郡山、福島と移り、それでも4世代10人家族の暮らしを一生懸命支えてきた14年間のことを語ってくれました。そこにあるふれるのは家族愛と津島愛。たとえ時間がかかっても、必ず津島とその生活を取り戻します、と結びました。

代理人からの陳述は、まずは山田弁護士。テーマは「原状回復の法的な確認」。今、除染したから帰還できますよ、という地域も、なかなか住民は戻らない。それはなぜかというと、住民参加の除染ではない、中途半端な除染だからだ。「原状回復の法的義務が認められれば、住民が除染協議に参加し、住民の納得する適切な放射能の除染・低減を実施していくことが可能となります」。私は、ここでも「私たちのことを抜きに私たちのことを決めるな」という当たり前のことのが疎かにされているな、と感じました。

次に白井弁護士からB.5.bの件についての陳述がありました。B.5.bには2つの側面があるといいます。一つはテロ対策としての側面。もう一つは過酷事故防止に有効な対策としての側面。電源の確保、炉心冷却、そのための水、これらの過酷事故を防ぐための不可欠の事柄が重要であるというB.5.bの基本をせっかくアメリカで学んできたのに、保安院の中で共有されていなかった、ということです。このB.5.bの過酷事故対策の義務付けをおこなっていれば確実に過酷事故は回避できたはずだった、という内容でした。

菊間弁護士からもB.5.bとシビアアクシデント対策義務違反について。原子力発電所には本質的な危険性があるので、それを理解し、対策を取らなければならない。それなのに国はシビアアクシデント対策（特に全電源喪失対策）を義務付けず、スリーマ

イル島、 Chernobyl の事故があっても、40年間も何もしなかった。それどころか、30分を超える電源喪失を考慮する必要はないし、(1990年)、シビアアクシデント対策は、原子力事業者の自主的な取り組みに任せるとした (1992年)。2007年には IAEA の提案を無視した。B.5.bについて学んできても無視した。その結果の大事故である。どのような津波を予見したとしても、どのような対策を講じたとしても、必ず「想定外」は起こり得る。だからこそ、全電源喪失対策を義務付けるべきであった、と主張しました。

最後は宮腰弁護士から、東電の悪質性についての陳述がありました。東電が原発建設時からいかに安全対策を怠ってきたかを具体的に示す、ジャーナリストの政野敦子意見書についての陳述でした。

危険その1 高さ40メートルの海岸ぶちにあつた敷地を取水のため、10メートルまで切り下げて原発を設置した。海鶴の巣は崖の24~25メートルのところにある。これは過去の津波を避けての知恵である。地質学者関陽太郎氏の指摘に、東電福島事務所の豊田所長(後の副社長)は「津波と言ってもせいぜい10メートルだろう」と言って無視した。関氏は三陸海岸での津波を研究していた作家の吉村昭氏から20メートルから50メートルの津波が過去にあったことを聞いていたが、豊田所長は経済コストを優先した。

危険その2 原発事故原因には高圧送電線鉄塔が倒壊し、外部電源を喪失したこともある。東電は台地を切り崩した土を谷に「運んできて、捨て」そこに鉄塔を建てた。この杜撰な処理により、鉄塔は地震で倒壊した。2006年に衆議院議員の吉井英勝がその危険性を指摘していたが、無視した。

危険その3 福島第一原発に外部電源を供給する変電所を、双葉断層が活断層と知りながら、その真上に設置した。地震の揺れによる液状化で損壊し、外部電源供給はできなくなった。

危険その4 地域住民や吉井衆議院議員が、津波による危険性に対して安全対策を申し入れ、原発の冷却機能性確保と海水ポンプの水没防止対策を取るように求めたが、無視した。

このようにして、事故は起こるべくして起きた。

という内容です。私は、「海鶴の教え」は以前別の裁判で聞いていましたが、高圧送電線鉄塔がそんなところに建てられていたなど、あまりのいいかげんさに驚きました。

4人の弁護士の陳述はどれも短い時間でしたが、膨大な時間をかけ、資料を集め、しっかりと陳述書を提出した上のエッセンスを語った、と報告会で

聞いて、そのご苦労がしのばれました。報告会では、政野敦子さん本人からのレクチャーもあり、より理解が深まりました。

次回公判はついに長谷川公一さんの証人尋問です。この裁判のハイライト、クライマックスです。9月19日です。楽しみです。

なんとかして6.17最高裁判決を乗り越えたいものです。ふるさとを元に戻して、みんなで帰る、このような裁判が続いていることを多くの人たちに知ってほしいと思います。

（立石美穂）

「第173回女川原子力発電所環境調査測定技術会」傍聴記 ・・・「使用済燃料乾式貯蔵容器」は「安全」 本当かな？・・・

2025年8月6日に「第173回女川原子力発電所環境調査測定技術会」を傍聴してきました。今回も、資料は、宮城県のHPにアップされておりましたので、御覧ください。

会議等開催のお知らせ - 宮城県公式ウェブサイト

委員の方はタブレットを中心に、必要な方は紙資料も見て対応しておりました。だいぶ慣れてきたようでした。傍聴者は紙資料です。インターネットで資料が見られるので、会議に参加しなくても検討できます。簡単に気になった所だけを報告します。

傍聴は、私+1+電力関係1名で、マスコミはゼロでした。委員は24中21名の出席でした。学識経験者は全員出席でした。

○高橋義広会長（宮城県復興・危機管理部長）が議長で、いつもの通り「放射能調査結果」と「温排水調査結果」が報告され、評価し了承され、8/25の「協議会」（石巻市で開催）で報告されることに。

https://miyagi-kazenokai.com/wp-content/uploads/2025/08/20250806_173sankousiryo1.pdf

・今まで、「技術会」と「協議会」の報告構成内容が違っていたため、作業が煩雑で、錯誤の要因となっていた。又、ダストモニターによる放射性物質濃度の評価も加わり（参考資料-2 別添1）、今後は、一つの資料に取りまとめるので、ヒューマンエラーの防止にもなるとの事。

https://miyagi-kazenokai.com/wp-content/uploads/2025/08/20250806c_173siryo1-1.pdf

https://miyagi-kazenokai.com/wp-content/uploads/2025/08/20250806_173sankousiryo3.pdf

・2025年6/9～6/24、1号機原子炉補機冷却海

水系（RCWS）が停止し、放水路内の流れがない状態となった。その期間、1号機放水口モニター計測率が高い値となる。（参考資料-3 図1参照）

調査の結果、人工放射性核種は検出されず、RCWS停止時は放水路内の流れがなくなり（参考資料-3 P2参照）、放水立坑内上層部の淡水層が、下部の海水層に混ざり、淡水層に含まれる天然放射性核種が係数率を上昇させた。

（委員からは、流れがない時も監視できるように出来ないかとの意見があった。）

https://miyagi-kazenokai.com/wp-content/uploads/2025/08/20250806_173sankousiryo5.pdf

・上記タイトルの通り、マガキ、アラメのCs-137の推移が表示されなかった（P3～5 赤印）。気象観測装置の更新が未記載（P6～8 赤アンダーライン）。

（委員からは、出されたデータで私たちは判断するので、データがないところで判断したことで自身の気が萎える。緊張感を持ってやって欲しい。再発防止策も具体策がないと厳しい意見があった。対策は、次回に出す様である。）

https://miyagi-kazenokai.com/wp-content/uploads/2025/08/20250806_173siryo4.pdf

・P6 (1) 2号機圧力抑制室内及び格納容器内の水素濃度検出器の指示値の異常

2025年5/26、6/20に、2号機の圧力抑制室内及び格納容器内の水素濃度検出器のそれぞれ2台のうちの1台が、正しい値を示していなかった。次回定期事業者検査で点検するとの事。

（次回の定期検査までに、水素放出事故があって、検出器も不具合を起こしたら、水素濃度検出ができなくなるよね？大丈夫かな？）

・P9～12 (4) 2号機使用済燃料乾式貯蔵施設の設置に係る事前了解の受領

・使用済燃料乾式貯蔵施設の概要①② (参考)

2025年7/19、使用済燃料乾式貯蔵施設の設置について宮城県、女川町、石巻市より事前了解。

(2024年2/27、宮城県、女川町、石巻市に対し事前協議の申し入れ、2024年2/28、原子力規制委員会へ原子炉設置変更許可申請し、2025年5/28、原子力規制委員会より許可)

今後、詳細設計「設計及び工事計画認可申請書」を原子力規制委員会へ提出。

(委員から、これは、「使用済燃料乾式貯蔵施設」という新たな施設が出来るという事で、放射性物質の管理体制として今までのモニタリングポストの位置で良いのかと、疑問が出された。モニタリングポストは6カ所ある(資料1-2 P89参照)、東北電力からは問題ないと回答があった。乾式貯蔵容器は、「閉じ込め」「遮へい」「臨界防止」「除熱」で完璧、が前提のようである。)

○ 今回も、放水口モニターでの測定に不備があつ

たり、測定値のまとめに未記載があつたり、水素濃度検出器にトラブルがあつたりしているが、「使用済燃料乾式貯蔵容器」は「安全」のようである。本当かな?

・次回「技術会」は、11/13(木)午後、仙台で開催予定。(2025.8.7記 兵藤則雄)



「第173回女川原子力発電所環境保全監視協議会」傍聴報告

···「予防保全」という言葉を使う段階ではない···

8月25日(月)13:30～15:00、石巻グランドホテルで、「第173回女川原子力発電所環境保全監視協議会」が開催されました。

出席者は委員35名中26名出席、傍聴は高野博さん、日野、朝日新聞記者、他3名。

座長伊藤副知事あいさつ：本日も報告があると思うが、東北電力は、水素濃度検出器の故障に対し、原子炉を計画停止して交換、安全運転に万全を期すとしている。また、乾式貯蔵施設設置計画も、搬出されるまでの期間の一時的保管を前提に、石巻市、女川町、本県も了解した。県もしっかり対応して、立入調査しながら隨時確認していく。

(1) 確認事項

ア、環境放射線調査結果(令和7年度第1四半期)

イ、温排水調査結果(　　〃　　)

ウ、環境放射線調査結果(令和6年度)

上記報告が宮城県、東北電力、水産技術総合センターからあり、概ね過去の測定値の範囲内だという内容。

【質問】*須田女川町長：「イ、温排水調査結果」で4月測定と5月測定の差異についてもう一度説明してほしい。→水産技術総合センター所長：1、2、3号機それぞれの浮上点の差異であり、潮流の変化で浮上点が捉えられなかった。20m～30mのズレがあった。(と答えたようだ)

*佐藤女川町議会議長：ほとんどが「福島事故の影響に起因する」という報告だが、海藻などからの放射性物質の検出は、海底からなのか、空間からなのか。→事故当時に沈着したものという認識だ。

(2) 発電所の状況について

～阿部(東北電力)からの報告説明

①水素濃度検出器交換に伴う原子炉の計画停止

・8月21日検出器異常で、安全運転に万全を尽くすため予防保全として原子炉を計画停止し、健全な2台も含めて全て交換する。

・交換後、再起動する。停止は10日間程度。

・法令に基づく国への報告する事象には当らない。

②長期施設管理計画の認可を7月9日に受けた。

③固化材変更等および所内常設直流電源設備(3系統目)の設置に係る設計及び工事計画認可申請の補正。

④乾式貯蔵施設の事前了解の受領。

⑤その他。

【質問】若林委員(東北大名誉教授)

① 4つの検出器は、同じものか。

→同じ仕様のものだ。

② 検出器は、放射能対策を施したものなのか。

→放射能の影響を検証したものを使用している。

③ 他の原発では使用しているものなのか。

→他社の件なので発言は控えるが、他社も設置していると思う。

【質問】長谷川副会長（東北大名誉教授）

- ① 4つの内2つがNGなのに、予防保全で交換するというが、「問題がないが交換する」と聞こえる。「予防保全」という言葉を使う段階ではない。定期点検まで待つつもりだったのか。
- ② 劣化している可能性がある。徹底した調査が必要だ。機器は、長期間点検チェックしたのか。
- ③ 同じものに交換しようということだが、同じ状態になるのではないか。
- ④ （交換で解決）対策が曖昧であり、ブラックボックスだ。測定方法、原理について説明をあらためて求める。

大 MAGROCK 下北半島スタディツアー・大間原発反対現地集会に参加しました

「核燃まいね！」たたかいの新しいうねりを

7月26～27日、脱原発金曜スタンディングの仲間6人と、猛暑の中を駆ける弾丸ツアーに参加しました。八戸一大間往復320km 2日間で14時間のバス旅です。感動、涙、笑い、怒り、新発見・・・。「戦争と原発（再処理工場）は必ず止められる」の思いを強くしました。新しい決意を胸いっぱいに帰仙しました。2日目は、須田さん、館脇さん、土屋さんら4人とも合流です。

バスツアーは豪華スタッフ★ “歩く走る核燃まいね” 山田清彦さん（核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団事務局長）の車内トラメガの休みないお話（バスが動き出して止まるまで、ほんとにずーと）、三多摩から青森にやってきて市議会に新しい風を吹き込む小熊ひと美さん、私鉄総連最高プロ南部バス労組のMさん、すばらしいトリオでマイクロバスでも快適。まわりの自然、風景、建物、施設、人々の暮らし一つひとつを、そこに関わる人々の歴史と固有名詞（寺下力三郎、坂井留吉、他にもたくさん・・・）を交えて。専門的なこともすべてが人間の思いベースで話されます。半世紀のたたかいの生字引だね。山田さんは今度仙台（9/28）にやってきますよ！

〈1日目〉★八戸から六ヶ所までは、米軍三沢基地、自衛隊駐屯地、両軍演習場・射爆撃場、広大な三沢稻作地、人々が血のにじむ開墾でつくった北の農地の中を疾走します。米軍戦闘機の騒音で集団移転先となった「大津」、天ヶ森射爆撃場の同じく「新地」の歴史と今の人々の暮らしも聞きました。六ヶ所は巨大な再処理工場、関連施設、たくさんの風車、石油備蓄基地・・・。PR館で90分「山田さんの壊滅批判集中講義」を受けました。これで再処理工場のことは「よくわかった」、すべての小中高校大学で「ヤマダキヨヒコ青森を語る」をやるべきだね。東通原発と広大な買収地、だれもいない原燃のPR館、

⑤ 国に報告しなくても良いという報告は、気になる。規制委員会の対応が悪い。規制委員会の能力を疑わざるをえない。

〈電力の回答〉→徹底して調べ、次回報告する。長期的確認も検証していく。国への報告は検証後行う。

【長谷川副会長】原子力の重大事故リスクに関わる。しっかり検証を。

※次回：2025年11月28日（金）仙台市内で開催予定。

（日野）

初めて目にした巨大なむつ中間貯蔵施設。

そして「海峡保養センター」一本州最北端の素敵な宿、一昔前の公共の宿そのもの（久しぶりの温泉一浴槽がでっかいーと新鮮な海山の幸）、仲間との再会、お話の山で夜は更けていきました。

〈2日目〉★早朝散歩はクマさん用心でバス。大間原発一望のあとは、“あさこはうす”（炉心直近250m、6匹のわんことの暮らし）。最近クマが出没し、「ここでわんこたちが追い払ったのよ」と今にもクマが出てきそうなあつこさんのお話。紫陽花の咲き乱れるお庭一ほかにも花と草木がいっぱい、コーヒー、ニンニク・・・。熊谷あさこさんの娘さん、あつこさんとの出会い。土屋さんが朝採りのタコのから揚げを売っていました。巨大スーパーまえだ、これだけの物と値段は宮城にはない。だけど全く都会の匂いはしないのよ。大間の昔からの八百屋や魚屋はどうなったんだろう。日曜日でよく分らなかった。

大MAGROCKは柏崎 phoka さんの澄み切った歌声（仙台に呼びたい、サトロジョイントで）、ラストは海に向けて「海」の大合唱で。現地集会に向けた2025大MAGROCKコール（今度実演で再現すっから）は素晴らしい！宮城も学ばなくては、といいたく感動。



✿第17回大間原発反対現地集会

恒例のコールで始まり。「原子力施設誘致して happy になった町はない」「世界を見てもこんなのがないぜ 民家の隣にフルモックス」「人道無視の原子力 あさこはうすをフェンスで囲む」「危ないものはなんでもかんでも下北半島か」と素晴らしい!函館行きのフェリーの時間があり、現地集会は1時間で盛り、1人ひとりの発言が心に突き刺さるものばかり。

★司会は八戸の吉川三絵さん、八戸 120 年のお蕎麦屋さん。★開会挨拶のよねざわいすみさんからは、「今年のレインボーパレードには、大間町長からメッセージは来なかった。ここで発言したことが町長の耳に入ったならそれは影響力がある」★大間原発訴訟弁護団の中野宏典弁護士からは、「裁判所が酷い。『原子力規制委員会の基準は、社会通念、みんなが思ったことを具現化したことだ』、世の人々がきちんと関心を持たないと裁判所がいいかけんなことをする」★地主の会の今村修さん「人間と核は共存できない。ここの他にも土地があるので、整備してみんなで使える広場にしたい。」★さいクリニックの大竹進さん「むつ中間貯蔵施設をもう一つ作るとんでもない計画、美浜では関西電力が新しい原発を作る、佐賀では選挙期間中にオスプレイの配備が決る、戦争になればどこの核施設もミサイルの攻撃目標になる。それは駄目。Yes peace No nukes！」★県労連の奥村栄さんからは「反原発運動と反核燃運動が統一すれば、原発が止められる。」★原子力資料情報室の高野聰さん(初参加)、大間の人から電話があり「『いつまでたってもフルモックスの燃料も作れない、調べてみたら、再生可能エネルギーの方が可能性があると知った。』と。その人は、今日、私たちのデモを見ているかもしれない。」★ストップ大間原発道南の会、大間原発訴訟の会、核の中間貯蔵はいらない下北の会からも、心にひびく思いが話されました。

★最後に中道雅史さんから、イスラエルとアメリカによるイランの核施設への攻撃目標はウラン濃縮工場。それは六ヶ所村の核燃サイクル施設にある。核燃サイクルは破綻しているのに、なぜ維持しようとしているのか。石破首相も宮下知事も、核兵器転用ができる事を認め、それが抑止力になるなどと言っている。青森には軍事施設もひしめきあってる。青森こそ、反戦反核を訴えなければいけない最大拠点です、としめくくりました。

デモはまた「いいかげんねんニッポン原燃」から「パレスチナ解放」まで、これまた最高。日曜日で、店は居酒屋?が一軒のみ開店の街中を、声をからして歩きました。帰路は横浜を抜けて八戸まで。

大マグロック参加者は2日間で 260 人、集会は 200 人の参加でした。実行委員会のみなさん、準備

してくれたみなさん、ありがとうございます。また来年会いましょう。



★MKさんの感想、「再処理工場は巨大な虎」さらに言えばウソとゴマカシ、捏造と作り話。六ヶ所・東通のPR館、巨大な施設群の核心は「地域に暮らす人々の暮らし、息遣いがまったく感じられない」こと。人間の顔が見えない。声が聞こえない。工場労働者の生活もまた、よく見えませんでしたが。★青森は戦争と核の拠点。7月23日に、ちょうど実施中の日米共同演習「レゾリュート・フォース・パシフィック」で松島基地飛来のF35 着陸の爆音を聞きました。今回は、土日は訓練なしなのか戦闘機は目撃せず。音も聞こえない。しかし、戦争は日々の現実であり、具体的です。そして、核施設もどんなに破綻的でたらめでも、3千人以上が働く巨大な施設です。

★ツアーライブ、現地集会・デモ、あさこはうす…。2日間のすべてが糧になる、体の中に力が湧くすばらしい旅でした。そこには、半世紀に及ぶ、そしてそれ以前からの青森に暮らし、たたかってきた人々の歴史があると強く感じます。2日間は、その凝縮であると。中道さんをはじめ今、青森で声を上げているすべての人々に心から連帯します。

★「フクシマを忘れない」「女川廃炉」と青森のたたかいを、反核燃の日や大MAG ROCKの日程だけでなく、私たちの日々のたたかい・取り組みにしていきたいです。働く仲間の現場のたたかいと一つのものにしていきたい。新しい仲間、若い人たち一緒に声をあげたい。本気で宮城や福島のヤマダキヨヒコを目指さなくては。

★個人的には六ヶ所・むつは 30 年ぶりくらいかな。昔は、バス停があり、小さな店やスーパーがあり、漁港があり、人々の暮らしがありました。上京一泊予行演習の繰り返しで備え万全(!?)。これからは宿泊・遠出にも取り組みたいです。

★参加されたみなさん。お疲れさまでした。大MAG ROCK・現地集会を準備・運営されたすべての仲間に感謝します。

★★今回の報告は「原発いらない!みやぎニュース」8月号にも掲載あり。ぜひ読んでください。

(脱原発金曜スタンディングの会 神保美彦)

【大崎から～法的に問題がないのなら正々堂々とやればいい】

長谷部恭男著「検証 安保法制 10 年目の真相 『仙台高裁判決』の読み方」（朝日新書）を読んだ。その仙台高裁判決を書いたのは小林久起裁判長。我われ大崎住民訴訟控訴審の最初の裁判長だった。第一回控訴審口頭弁論期日で、「第一審の判断枠組みはおかしい、別の判断枠組みで判決を書く」と言い、原告側が求めた証人尋問を却下し、いきなり結審し判決日を言い渡した。

あっけにとられながらも、「第一審の判断枠組みはおかしい、別の判断枠組みで判決を書く」に大いに期待を抱いた。ところが小林裁判長は判決を書かずして、急逝されてしまったのだ。急逝を悼みながら、とても悔しい、残念な思いをした記憶が蘇ってくる。

新しい裁判体による大崎住民訴訟控訴審の判決は、小林裁判長の遺志が引き継がれた様子もなく、原告側が敗訴した。判決は不当判決といえるもので、一審と同様、行政の追認以外の何物でもない。そこでこの年初に最高裁へ上告し、現在に至っている。

上の本は、小林裁判長の安保法制判決における深い考えを読み解こうというものである。その深遠なる思想、哲学には大いに感銘を受けた。感銘とともに、もし小林裁判長がご存命で、我われの控訴審の判決を書いたとしたらいつどんな判決になっていたろうと、今さらながら悔しくてしょうがない。

できれば口頭弁論期日での一言一句を再現し最高裁に届けることはできないものだろうか、そして小林裁判長が大崎住民訴訟控訴審で書こうとした判決に沿った最高裁での審理を促す、というか気運を高めることはできないだろうか、と新書を読みつくづく感じている。

最高裁での審理は伺い知ることができない。動きが見えてこない。そこで、今回は最高裁ではなく、県外焼却を巡る宮城県放射性物質汚染廃棄物対策室の回答・面談について、さらにそれに関連して我われが何をしているか或いは何をしようとしているかについて、書くことにする。ただ、後者は取り組み途上という事情から具体性に欠けたものになろうかと思うが、そこは予めご容赦願いたい。

●宮城県環境生活部放射性汚染物質対策室（放対室）の回答文書と面談

放対室との長い調整の結果、ようやく 8 月 18 日に回答書が交付され、面談が実現した。質問書の基になる前回の面談（5 月 16 日）からおよそ 3 ヶ月も経っていた。放対室の応対姿勢に不満はないが（4

月 1 日付けの人事刷新以来、応答は実によく、以前のように露骨に面談を断ったりするようなことはない。面談時の宿題等もまともに認識している）、問題は回答書の内容である。質問のポイントである県の「一定の責任」（1 月 23 付け回答文書、2.27 県議会部長答弁）について双方の認識はズレっぱなしである。県は、紹介したという狭い限定範囲の「一定の責任」から、一歩も踏み出そうとしない。実際には、これまでの文書開示請求で明らかになったことだが、環境省との度重なる事前打合せ（先例となった大崎市の場合）、事業者設備の事前調査、自治体と事業者の引合せ、事業者と自治体の打合せに同席、さらに自治体の事業者施設視察に立ち合い、モニタリング項目の確認等々、深く関わっているのである。さらに費用に係る予算措置（補助金・交付金）、契約にいたるまでのスケジュール（手順）、自治体間の処理の順番まで指定しているのである。県が主導し、自治体は県の傀儡なのである。どう見ても「紹介はしたが、決めたのは自治体」、紹介した限りの「一定の責任」には納まりきらないのである。

我われが最も重視しているのは、環境モニタリング報告である。大崎市開示文書で明らかになったのは、それが実に杜撰なものだったということである。県は特措法の「上乗せ基準」を確認したと言うのだが、そのレベルには達してないどころか、実にいいかけんな報告となっている。県は、モニタリング項目の確認をどのようにしたのか、またモニタリング報告のチェックをどのようにしたのか、これがとても大事になってきている。

放射性物質汚染廃棄物の焼却は、内部被ばくの恐れがある。それが大崎住民訴訟の争点のひとつなのだが、内部被ばくの危険性がないとはっきり証明されていないなか、焼却が実施され続けている。県内であろうが県外であろうが、焼却という方法で処理されることが許されていいはずがない。県外の場合は、より複雑に倫理的な問題も絡んでくると、わたくしは思っている。

しかし宮城県は、政策としてそれを推し進めようとしているのである。2 月の県議会で県知事は「これは（県外焼却）はいい方法である。今後も活用していきたい」と答弁している。我われはこの政策の間違いを、具体的なところで地道にひとつひとつ暴き、阻止していかないといけない。遅々とした歩みに歯がゆい思いをしながらだが、引き続き県との面談を重ねていく必要性を感じている。

●県外焼却のもう一つの視点

県外焼却は、大崎市においても、美里町や涌谷町、また加美町においても、「法的に問題はない、搬出先の風評被害がある。事業者の強い要望で非公開」との理由で、委託事業者非公開で進められている。これが大きな問題で、そもそもの諸悪の根源だと思う。

はたしてこの論法はどこまで正しいのか。法的に問題がないのなら正々堂々とやればいい話だが、何故そうしないのか。風評被害を言うなら、それを払拭すべく科学的根拠を示せばいいのではないか。8,000Bq/kg 以下は燃やしても人体や環境に被害は及ぼさないとしっかり証明して見せればいい。8,000Bq/kg 以下の除染土を国が全国的に再利用しようとしているなら、安全性はどうに証明されているはずである。

いままでもそうだが、この風評被害という言葉は、為政者側に都合のいいように隠れ蓑として利用されていると思う。県外焼却に関する県の開示文書を見る限り、非公表にこだわっているのは、事業者よりも、むしろ環境省と県の方である（もっともほとんど黒塗りなので、わずかに消し残された文章からの読み解きだが）。とすれば、何故環境省は事業者、搬入先（処理事業者施設所在地）を非公表にしなければいけないのか。

放射性物質の処理は謎に満ちている。謎のうちに、有耶無耶にして処理されている、というのが実情ではなかろうか。風評被害をもたらすような危険物質

だったらなおさらのこと、公明正大に、ガラス張りの情報公開のもとに行われないといけないはずである。

我われは、なんとかこの矛盾に満ちたやり方をやめさせねばならない、そのためには非公開にされている内容を事実でもって暴くことが必要である、そう思っているところである。

前回報告の 6.10 参議院院内集会のような全国的な認知度を高めること、地道に調査を進めること、さらに有識者の方々の叡智を結集することが、今必要とされていると痛感している。

（2025.9.8 記 大崎市 芳川良一）



今、女川では その 25. 「ここにも桜がほしいなあ」

阿部美紀子

女川原発阻止闘争が敗北して建設が始まった後、これから活動をどのように進めたらいいのかと思ったとき、私は“つくる活動”に学ぼうと考えました。1999年、蔵王のブナと水を守る会に参加し、蔵王の山々にブナを植えてきました。震災の翌年からは、東京の植樹団体に支援をいただき、女川町内に木を植え、10年ほど前からは、自立再建した店舗や町営駐車場にシンボルツリーとして花海棠（ハナカイドウ）を植えてきました。

またそれとは別に、原発反対の友人や色々な友人にいたいたいたカンパで、浜に枝垂れ桜を植えてきました。大石原、御前、尾浦に1本ずつ。飯子浜では、貞男さんの長女であり三和ちゃんのお姉さんからいたいたいたカンパで、神社の傍に1本、原発反対の仲間たちが集まって皆で植えました。

私が枝垂れ桜を選んだのは、寿命が長いこと。

“のりひび（現闘）”の長屋があった眺望荘（地名）にあった枝垂れ桜、2メートルも津波に浸り、その年に蕾は開かなかったものの、家人の手入れによって翌年は見事に満開。ガレキだらけの中をボツンと1か所ピンクに染め、遠い避難所からガレキをかき分け観に来た人を勇気づけた枝垂れ桜。これにあやかりたいと思ったからです。

今年に入って、原発反対闘争を共に闘った故渡会正蔵先生の娘さんからカンパをいただきました。私が今住んでいるところは、以前桜ヶ丘と呼ばれていました。しかし、造成のため桜の木は総て伐採されてしまいました。地区の人の、「ここにも桜がほしいなあ」という声で、区長や女川町役場にお願いし、カンパで街区公園の傍らに枝垂れ桜を植えることになりました。日程はまだ決まっていませんが、11月頃になると思います。

【インフォメーション】

〔詳細はそれぞれの主催者に確認して下さい〕

第 585 回 女川原発を廃炉に！ 福島原発事故を忘れない！子供を守れ！ 汚染はいらない！ 脱原発みやぎ金曜デモ

日時：9月26日（金）元鍛冶丁公園
(18時15分集会、18時35分デモ出発)

主催：みやぎ金曜デモの会（代表 西）

〈連絡先〉090-8819-9920（館脇）

e-mail:miyagi.no.nuke@gmail.com

ブログ：<http://miyaginonuke.blog.fc2.com/>

twitter:@miyagi_no_nuke

「第 104 回甲状腺エコー検査 in なとり」

日時：9月27日（土）10時～14時30分
会場：日本キリスト教団名取教会

「第 105 回甲状腺エコー検査 in かくだ」

日時：10月19日（日）10時～13時
会場：角田市市民センター
寺澤政彦医師（てらさわ小児科／仙台市）
検査費無料・要予約
主催：日本基督教団東北教区放射能問題
支援対策室いずみ
問合せ：022-796-5272

第 42 回日本カトリック正義と平和全国集会 2025 仙台大会 希望は欺かない -大震災から 14 年つなぐ思い 国籍を超えて歩む平和への道-

日時：10月11日（土）フィールドワーク
10月12日（日）14時～
基調講演「震災と原発事故の経験、そこから平和のためにできることは何か」幸田和生司教
シンポジウム「原発と向き合うなかから、目指すべき未来を探って」館脇章宏氏/中筋純氏
10月13日（祝・月）分科会
10時～「福島原発事故の実相を伝え続けていくために」高瀬つぎ子氏（福島大特任准教授）
13時～「女川原発の危うさと未来への道筋」日野正美氏（女川原発の避難計画を考える会）
13時～「ストップ・ジェノサイド in ガザ」石川雅之氏（パレスチナと仙台を結ぶ会）
「戦後 80 年広島の原爆」「沖縄の夢」「東日本大震災 14 年の歩み」「ハンセン病問題」他
（参加費 1000 円）
会場：仙台カトリック元寺小路教会他
主催：カトリック仙台司教区
問合せ mail : sendai.seihei2025@gmail.com

津島裁判を支え

6.17 最高裁判決を乗り越える集会

「全電源喪失対策の米国（NRC）B. 5. b について」

講師：長谷川公一氏（東北大学名誉教授）

日時：11月8日（土）午後

会場：仙台弁護士会館 4 階大会議室

主催：集会実行委員会

【編集雑記】

●7月28日夕方、東北電力本店1階会議室で、脱原発東北電力株主の会7名と、東北電力からは原子力部等の課長・副長等を含め28名が参加して、「説明の場」が開催された。株主総会に株主の会等が提出した100+5項目の「事前質問書」（新電力への契約切替え等で販売電力量減少、女川2号機の安全対策工事費と特定重大事故等対処施設の総工事費、「使用済燃料乾式貯蔵施設」、2号機のひび割れた炉心シラウドは交換しないまま再稼働強行、女川3号機の再稼働、東通1号機の安全対策工事完了時期、200万kW再生可能エネルギー開発計画、系統用蓄電池網整備、日本原電への支援、従事者被曝等）に対し、一項目ずつ口頭回答。「原発再稼働と再エネ出力制御」の質問に対し「2024年度32回、約2.1億キロワット、25年度は6月8日時点で41回、年度推計値約4.8億キロワットの出力制御」し再エネ電気を捨てた事などが判明。（※録音データ起しし、『事前質問と回答』を編集、風の会HPに掲載中。興味のある方はご覧下さい。）たかが電気を起こすのに、危険極まりない“核”を使う必要はない。（空）

【もくじ】

- 「経路依存性」を打ち破れ！ 1
- ふるさとを元に戻して、みんなで帰る 5
- 使用済燃料乾式貯蔵容器は「安全」本当かな？ 6
- 「予防保全」という言葉を使う段階ではない 7
- 「核燃まいね！」たたかいの新しいねりを 8
- 法的に問題がないのなら正々堂々とやればいい 10
- 「ここにも桜がほしいなあ」 11
- インフォメーション 12

【別冊もくじ】

- 「中間取りまとめ（案）」に対するパブコメ 1
- 批判的パブコメ意見は「スルー」 4
- 7.12 硫化水素流出事故の情報公開顛末記4 6
- 女川原発アラカルト 10
- 脱原発みやぎ金曜デモ 12
- 汚染廃棄物「焼却」をめぐる動き 12

